

CHRONOS



「かけがえないもの」 近藤若菜（本学健康科学部学生／写真部）

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼びおこすとされた橘の花の香り。
その橘を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の天空をはばたく鳥を
イメージしています。

クロノス [時の鳥] vol.44 2021.3

C 〈特集〉感染症と社会史
O 花園今宮の疫神 ―御霊信仰と京都―
N 病と祈り ～日本古代の考古資料から読み解く
インフルエンザ・パンデミック 1918-1919
T 黒死病と新しい日常
E パンデミックのなかで読書するということ
イギリス女性生活誌 44
N 近代日本音楽史を彩る女性たち 5
N 物語の女性 5
T 日本の伝統技術を守る 女性の進出 3
S 新刊紹介
INFORMATION

花園今宮の疫神 — 御霊信仰と京都 —

野田 泰三 本学文学部歴史学科教授

古来、我が国では、天変地異と言われる異常気象や自然災害、あるいは疫病の流行は、政治的に不遇の死を遂げた人物ないし外国の疫神がもたらすと考えられ、それらを法会や芸能によって慰め楽しませることにによって災厄を鎮静しようとした。いわゆる「御霊信仰」である。

貞観五年（八六三）五月に早良親王や藤原吉子・伊予親王母子らを祀って神泉苑で挙行された御霊会は、平安京における都市型祭礼の端緒として著名であるし、京都の夏を彩る祇園祭は、近世以前は祇園御霊会と称され、その起源は平安期にまで遡ることもよく知られている。また学問の神様として名高い菅原道真を祀る北野天満宮も、遠く大宰府の地に客死して怨霊と化した道真を鎮めるべく、天満天神の神号を奉って祀ったことに由来する。

このように京都には御霊信仰に基づいて創始された神社が数多く存在するが、筆者の地元右京区花園の今宮神社も御霊信仰に由来する神社のひとつである。京都市内で今宮神社というと、やすい祭やあぶり餅で有名な北区紫野の今宮神社が有名であるが、花園の今宮神社は創始の経緯が判明する珍しい事例であるので、以下に紹介したい。

今宮神社は花園・安井地区の鎮守としてひっそりとたたずむ小社であるが、本殿は寛永二十一年（一六四四）、仁和寺門跡深法親王が徳川家光の財政援助によって仁和寺伽藍の大改修を行った際に新造されたという由緒もつ。現在の祭神は素戔鳴尊とされるが、当初は違った。小野宮右大臣と称され、同時代の権勢者藤原道長を批判的な目で眺めたことで知られる藤原実資の日記『小右記』長和四年（一〇一五）六月二五日・二六日条には以下のようにみえる。

西京花園寺の坤方、紙屋河の西頭、新たに疫神社を下す。これ西洛の人の夢想と云々。或いは云く、託宣と云々。今日東西京師の凡庶、首を挙げて御幣を捧げ、神馬を具し社頭に向かうと云々。（二五日条）

将曹正方云く、昨、花園今宮御霊会始行す。かの宮の牒により、作物所神室を造る。右近衛「」左右衛門・左右兵衛、奉仕の事等有り。左右馬寮、十列を牽く。両京の人、昨より通夜、今日終日、御幣・神馬を奉り、避ける路無し。垣内に積紙空処有る無し。あたかも紫野神社の如くんば深く命を惜しむにより、真偽を尋ねざるか。もし霊験有らば最も帰依すべし。（二六日条）

西洛（右京）の住人の夢想（夢のお告げ）もしくは託宣に基づき、花園寺（現在の妙心寺の地に所在）の南西、紙屋川の西辺にあらたに疫神を祀る社が造立された。六月二五日にはその花園今宮社の御霊会が始まり、都の住人は御幣を捧げ神馬をともなって社頭に殺到し、通夜する者も多かった。右近衛府の官人紀正方によれば、今宮社からの要請に応じて作物所（天皇らが宮中で用いる調度品を作成する役所）が神室を作り、六衛府の官人達が祭礼に奉仕をし、左右馬寮によって走馬（馬を走らせる儀式。競べ馬）がなされたと言う。

今宮とは「いま新たに出来た（祀られた）社」の謂である。都の一住人の夢でない託宣によってにわかには造られた社でありながら、朝廷を動かして神室を作らせ、祭礼（御霊会）には衛府官人が動員され、走馬まで行われたほどの盛儀であった。

実はこの年の三月頃から秋にかけて「天下咳病」「疫癘」が流行し、多数の死者が出ていた。そのため、五月六日・九日には疫神を祓う四角祭・四堺祭が、一日には臨時の仁王会が開催されたが、のち三条天皇の病も重なったため、五月二六日には大赦を実施、六月一日には改元の可否が議論され、二三日には再度の臨時仁王会、閏六月には相撲節会を止めるなど、朝廷は対応に右往左往している。八月一七日には出雲寺（路）でも御霊会が行われた。花園今宮の御霊会はこうした状況下で催されたのである。

注目されるのは、今宮社が「牒」を発していることである。牒とは公式令に定める文書様式のひとつで、所管関係のない官司間でのやり取り等に用いられた。「かの宮の牒」が発せられた以上、今宮社には何らかの人的組



今宮神社 鳥居から東を臨む

織が存在していたはずである。お告げによって創始されたはずの今宮社に、社人の存在が見え隠れする。解せない話ではある。

藤原実資は二六日条の最後に「紫野今宮社のケースのように変に疑って命を落とすのは惜しいので、真偽の程は確認しないが、この後霊験が顕れたならばあらためて帰依することしよう」との感想を記した。物事を冷徹に捉えるむきのある実資は、今宮御霊会の盛儀に聊かの胡散臭さを感じていたようである。あにはからんや、この三日後、二九日条には「花園疫神崇袍(祀力)の後、病患いよいよ倍すと云々」—御霊会の後かえって病人が増えている—と書き付けることになる。

疫神や御霊(怨霊)を祀る御霊会は、疫神や御霊に都から退散いただくために京域のはずれで行われることが多い。平安期に御霊会の挙行が確認される紫野、出雲路、祇園はいずれも京域に隣接した京外の地である。では花園は?というところ、現在今宮神社が鎮座する地は平安京の右京一条四坊一四町。境内の西辺が平安京の西端を画する西京極大路に接しており、ギリギリではあるが京域内になる。ただし、平安中期には右京域は都市としては衰退していたと考えられており、北山から張り出したいくつかの尾根とその間の谷の地形が明瞭に残る現況をみても、そもそも平安京造営にあたって京域の西北隅にあたるこの地区がどれほど開発・整備されたか、おおいに疑わしい。花園今宮社の所在地が一世紀半ばには京外との認識がなされていたとしてもおかしくはない。

ちなみに、今宮社のすぐ西には五位山と双ヶ岡、五位山の北には双ノ池が所在し、風光明媚な一帯には、平安初期以来、清原夏野ら貴族の別邸が建てられた。夏野の別邸は西京極大路を挟んで今宮社のすぐ西側の地と推定される(夏野の死後、双丘寺という寺に改められ、一二世紀前半には待賢門院藤原璋子(鳥羽天皇中宮)によって法金剛院が造営される)。九世紀末には北へ一キロほどのところに光孝・宇多天皇父子が仁和寺を造営し、以後、平安末期にかけて仁和寺の周囲には四円寺や諸院家が建ち並び、今宮社の北方には寺院街が形成されていく。今宮社が創建された頃、平安京西北部の景観も大きく変わりつつあった。

実資にかかつては面目を失った今宮の疫神であったが、三七年後の永承七年(一〇五二)、花園の地に再び疫神が降臨する。

西京住人の夢に神人と称する者が現れ、「吾は唐朝の神なり。唐土には住む所が無く、日本に流れ来たった。吾の行くところでは悉く疫病を發するだらう。しかしもし吾を祀り住む所を造るならば病患を止めよう。その場所は瑞相を表して汝に示そう。その所に吾が社を建てよ」と告げた。夢想を得た西京の人は並寺(双丘寺)の傍らに鈎の形をして光り輝くものを見た。この事を人々に告げたため、東西京の人々がその所に向かい、社屋を立て、諸衛府の官人等が祭礼を催し、近隣の人々が雲集して饗応した、という。これは藤原資房の日記『春記』同年五月二八日条にみえる記事であるが、資房は続けて「この夢、誰人のか知らず。後のためにこれを記す。世に今宮と号すと云々」と記す。『続古事談』巻第四にも「後冷泉院ノ御時、世間サハカシカリケル年、ナラヒノヲカノ辺ニ社ヲツクラハシツマルヘシト示現アリテ、兵衛府生時重ヲハシメテ六衛府ノモノトモ社ヲ作りテ、御霊会オコナヒケリ。花園ノ社トソイヒケル」とみえている。



中央奥の建物が今宮神社本殿

「ナラヒノヲカ(双岡)ノ辺」の「花園ノ社」というのは、常識的に考えると『小右記』にみえる花園今宮社を指すと思われる。長和年間に創始された今宮社がいったん衰退し、永承七年に至ってあらたに造営されたものか。事情は判然としないが、このたびも前年冬から疫病が流行するなかで疫神が祀られたのである(『扶桑略記』)。そしてこのときも、京中の住人とともに「六衛府ノモノトモ」の関与がみられる。

歴史学者の網野善彦は、右京一条・二条には諸司厨町が存在し、『今昔物語集』に登場する西京住人には諸司の下級官人が多いことを指摘している。朝廷・貴族社会に足掛かりを持つ彼らは、その職権や人脈を活かして財を成し、都市平安京の有力住人となる者も多かった。

長和・永承、二度の花園今宮の御霊会は、自然発生的に起こったのではなく、疫病流行を機に一攫千金をもくろむ彼らが仕掛けたものではなかったか。今宮社の「垣内」に山と積まれた幣帛や捧げ物、神馬はその後どうなったのか?どこへ消えたのか?と考えると、信仰の陰にチラつく、機を見るに敏な都市住人の姿をいつい想像してみたいくなる。

〔参考文献〕

網野善彦「西の京と北野社」『網野善彦著作集』第一三巻、二〇〇七年

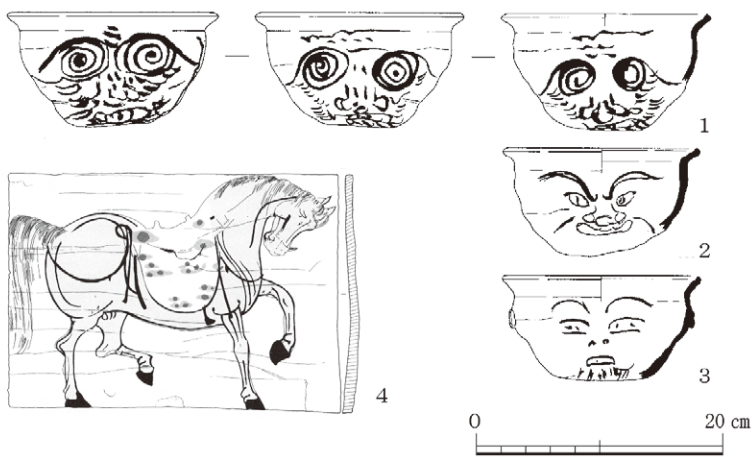
病と祈り ～日本古代の考古資料から読み解く

中久保 辰夫 本学文学部歴史遺産学准教授

人類の長い歴史において感染症は幾度も広がり、人々は快癒を願い、また病にかからぬよう、祈りを捧げてきた。新型コロナウイルスが蔓延し、日常生活が大きく変貌した二〇二〇年、歴史研究では感染症や病氣、そしてそれに人々がどう向き合い、乗り越えようとしたのかといったことについて関心が広がっている。

免疫学が発達していなかった古代社会。人々は疫病を退けるために、数々の儀礼行為を行った。祈りの言葉や心意は考古資料には残らないことの方が多いが、その一端はモノとして伝わることもある。

日本古代の代表的な祭祀関連資料には、人形、土馬、絵馬、呪符木簡、そして人面墨書（描）土器などである。たとえば、「長岡京」東南部にあたる京都市伏見区水垂遺跡の自然河川（SD二八五）から出土した多量の人面墨書土器は、疫病を払うために川に流されたものと考えられている。人面墨書土器とは、小さな壺や甕、鍋の外側に筆で顔を描き、おそらく土器のなかに呼吸をいれて、川に流すといった儀礼行為が想定されているものである。水垂遺跡から二六〇点出土した人面墨書土器は、土器そのものの規格性は高いが、描かれた容貌は個体差が大きく、同一筆者と推定できるものは少ないとい

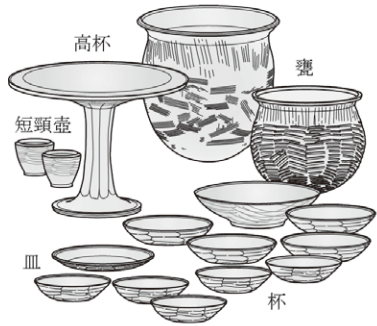


絵馬 4：平城京左京二条二坊・三条二坊 SD五三〇〇 人面墨書土器 1～3：水垂遺跡 SD二八五

図1 日本古代の祭祀具の一例

う（図1-1～3）。用意された土器に、人々がそれぞれの祈りを捧げたものであろう。なかには目をぐるぐると表現しているものもあるが、高熱にうなされているのだろうか（図1-1）。この河川からは延暦十（七九二）年三月一六日の日付が記された荷札木簡が出土した。この前年は、長岡京内で疱瘡（天然痘）が大流行した年にあたる。疫病鎮静や快癒への願いが人面墨書土器にこめられていたのかもしれない。

寺社に奉納されている絵馬も、古代にさかのぼり、祈りが物象化したものといえる。絵馬は、七世紀半ばの資料として難波宮西北谷出土例（大阪府）、八世紀前半には平城京二条大路出土例（奈良県）があり、これらが出現期の例とみられている。古代の絵馬には、唐尺により規格性をもつてつくられているもの、中国とモンゴル高原の馬に特徴的な片側の前足と後脚を同時にあげて進む「側対歩」という表現をとるものがある（前田二〇一九）。前田俊雄は、この「側対歩」表現が唐代に中原に普及し、それが遣唐使を通じて日本に伝来した当時最先端の祭祀であった可能性を指摘する。



平安時代前期の土師器（中谷俊哉画）

最近では「疫病対策が日本古代の食器にもあらわれているのではないか」と注目が集まっている。二〇二〇年夏にひらかれた奈良文化財研究所平城宮跡資料館のミニ展示「古代のいのり―疫病退散―」では、天然痘

の退散を願う呪符木簡、上述した絵馬とともに出土した多量の完形土器資料が感染拡大を防止するために投棄されたのではないかとという仮説が提示された。この土器群は、天然痘で亡くなった藤原麻呂の邸宅跡から廃棄されたものを含むとみられているからである。奈良時代後半に共用とみられる大皿の使用が減少し、小型食器が普及したことも対策であったのかもしれないという。

奈良時代後半から平安時代にかけてという時期は、都城の人口が増加し、都市生活が定着する時期にあたるが、興味深いことに、次第に土師器の杯や皿が主な食器となっていく。この土師器食膳器は、宴会などでは一度きりの使用であったとみられ、耐久性には乏しいが、平安時代前期では平安京において約九割の出土量を占めるようになる（小森一九九四）。こうした食器が大量に生産され、消費された背景は、一見、無駄使いのように思われてきたものの、古代人にとっての清潔感のあらわれであったかもしれない。

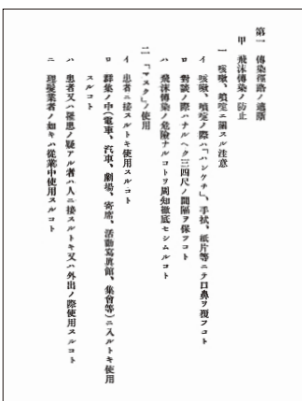
清少納言が『枕草子』で土師器を「清しとみゆるもの」と表現した、その真意が考古学的に評価できるのかもしれない。それは古代にも訪れた「新しい生活様式」だったのだろうか。

「参考文献」

- 木下保明ほか「水垂遺跡 長岡京左京六七条三坊」京都市埋蔵文化財研究所、一九九八年
- 小森俊寛「土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』古代学協会・古代学研究所編、角川書店、一九九四年
- 奈良国立文化財研究所「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告」一九九五年
- 前田俊雄「日本出土絵馬の基礎的研究」『奈良県立橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第42冊 奈良県立橿原考古学研究所、二〇一九年

インフルエンザ・パンデミック 1918-1919

内務省訓令
「流行性感冒の予防に関する件」
(大正10年1月6日付)



第一次次世界大戦末期から戦後にかけて、アメリカから発生したH1N1亜型インフルエンザ・ウイルスによるパンデミック（いわゆるスペイン風邪）が世界中に広がり、猛威をふるったことはよく知られている。感染者数は推定で五億人、死者は五千万から一億人にのぼるといわれている（この数値は第一次世界大戦での戦病死者八戦闘員・非戦闘員合わせてVの推定値二〇〇〇万人を上回っている）。日本では一九一八（大正七）年の一〇月頃から流行しはじめ、内務省衛生局が一九二二（大正一一）年に刊行した詳細な報告書『流行性感冒』（現在この報告書は国立国会図書館デジタルコレクションでインターネット公開されており、誰でも容易に閲覧することができる）によれば、「全世界ヲ風靡シタル流行性感冒ハ大正七年秋季以来本邦二波及シ爾來大正十年ノ春季ニ亘リ継続的ニ三回ノ流行ヲ来シ総計約二千三百八十余万人ノ患者ト約三十八万八千余人ノ死者トヲ出シ疫学上稀ニ見ルノ惨状ヲ呈シタリ」というありさまであった。ちなみに、二〇二〇年一月一〇日現在での

体、たとえば濾過性病原体 (filterable virus) に求めるべきであるとする説とが対立していて、容易に結論が出ない状態にあるというのである。

これに関連して、『読売新聞』一九一八年一月二五日付によると、同年一月二四日に開催された日本医学会で、プファイフェル氏病原説を支持する北里研究所の研究者と肺炎球菌説を主張する東京帝国大学・伝染病研究所の研究者が激しい議論を戦わせたという。それに對して同紙の一月二七日と二八日付の連載記事で、前パリ細菌研究所長の山内保が「現時の我医学者は徒らに議論を好み医学者が最も緊要とすべき事実の上に立つて争うことを忘れて居る」と手厳しい批評をくだしている。山内は帝国大学医科大学を卒業後、ドイツに留学し、さらにフランスのパスツール研究所でメチニコフに師事した人物であり、一九一九年にイギリスの『ランセット』誌にインフルエンザの病原体は細菌濾過器で除去されないウイルスであるとする論文を他の二人の研究者とともに発表した。インフルエンザ・ウイルスの最も早い発見者の一人として、現在再評価されている人物である。この連載記事で山内はウイルス説を主張していないが、北里研、伝研双方の研究を、合理的統計的論拠をもたない「浅薄なる実験を基として空論を弄する」もので「何等の価値をも認められぬ」と断定している。

ところで、インフルエンザ・パンデミック時の日本の総理大臣は原敬であった（在任期間は一九一八年九月二九日から一九一九年一月四日）。原が詳細な日記を残していることはよく知られているが、公開されている『原敬日記』第五卷（福村出版、一九八一年）は、A5版二段組、一頁一三九二字詰めで、日記本文は全部で四六四頁。そのうち首相在任中の日記が四六四頁をし

COVID-19の感染者数は全世界で約六八九〇万人、死者数は約一五七万人にのぼる（NHK調べ）。日本国内では累計感染者数約一七万人、死者数二四八七人である。このインフルエンザ・パンデミックが日本を襲った状況については、速水融によるすぐれた研究（速水『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、二〇〇六年）が公開されているので、くわしいことはそちらに譲るとして、前掲『流行性感冒』を一読して、当時インフルエンザの病原体が何であるのか、どのように認識されていたのかがわかったので、簡単に紹介しておきたい。

報告書では「インフルエンザ」ノ病原問題ハ猶ホ未解決ナリ」とされている。一八八九〜九一年のインフルエンザ・パンデミックのあと一八九二年に提唱され、一度は学界でも承認されたりヒヤルト・プファイフェルのインフルエンザ菌（この報告書ではプファイフェル氏菌と記されている）病原説が、今回の流行でその正しいことが証明されるにいたらず、かといってそれを全面的に否定することもできない状態にあり、プファイフェル氏菌病原説を支持する者と、それは誤りであるととして肺炎球菌を病原とする者、さらにいずれとも異なる他の病原

め、インフルエンザ流行中の一九一八年九月二九日から一九二〇年末までをかぞえると三二七頁になる。かなりの分量といつてよい。しかしながら、この大部の日記の中に「インフルエンザ」はもちろんのこと「流行性感冒」という語はほとんど出てこない。「風邪は近來各地に伝播せし流行感冒（俗に西班牙風と云ふ）なりしが、二日間斗りにて下熱し、昨夜は全く平熱となり」と記されているように、一九一八年一〇月下旬に原自身が罹患している、それに関連して三箇所ほど「流行感冒」という語が登場する。それ以外は、翌年二月一日条に元老山県有朋の病状について「気管支炎にて肺も少々侵され熱度九度以上にて降下の模様なしと云ふ、流行感冒らしければ老体には危険なるべし」とあるくらいである。流行性感冒で早逝した竹田宮恒久王薨去の記事は出てくるが、その病因についてはふれられていない。

流行性感冒が猖獗をきわめており、何万人もの死者が出ているといった記述は日記のどこをさがしても見当たらない。日記には閣議の内容が記されているが、流行性感冒対策が閣議で取り上げられたとの記述は見つからない。また、原は山県とたびたび会見して政治問題を話し合っているが、その話題にも流行性感冒対策はまったく登場しない。『原敬日記』だけを読んでいると、当時の日本にインフルエンザ・パンデミックなど存在していなかったような錯覚におちいりかねないのである。現在、COVID-19予防対策が各国政府の最大の課題となっている現状を見ると、これはきわめて異常なことに思える。『原敬日記』という希有の史料を利用する上で、この日記がこのような性格をもつものであることに留意しておくべきであろう。

黒死病と新しい日常

渡邊 和行 本学文学部歴史学科教授

一三四七年にクリミア半島の港町カッファを襲った黒死病は、四〇五年で全ヨーロッパに広がり、人口の三分の一が失われた。本稿では黒死病と呼ばれて恐れられたペストは何をもたらしたのか、黒死病後の新しい日常とは何であったのかについて、昨今のコロナ禍を念頭に置きながら考察しよう。

一四世紀中葉のヨーロッパでは、地震・津波・旱魃・洪水などの災害と百年戦争による不作によって食糧と栄養が不足していた。その上、都市や農村は鼠や蚤の増殖に適した不潔な環境であった。そのヨーロッパをペストが襲う。ジェノヴァの植民都市カッファの再征服を企てたタタール軍の間にペストが流行した。鼠がカッファの街に侵入してペストが広がる。街を脱出したジェノヴァのガレー船とともに鼠も移動し、船内はもとより寄港地もペストに感染した。ペストは、コンスタンチノープル、シチリア、ジェノヴァ、マルセイユを経て中西部フランスやスペインへ、またイタリアからアルプスを越えて中欧に進み、分岐してパリやロンドン、そして北欧からロシアへと広まった。十字軍以降の活発な交易活動が感染を広げたのである。

ペスト襲来を受けて『デカメロン』の主人公十人がフィレンツェに隔離された。一三七四年に隔離法を初めて定めたのは、北イタリアの都市レッチオだ。すべてのペスト患者は町外れの原野に移され、人間の看護の手を離れて神の手に委ねられる。患者の付添は十日間町に戻ることも、町の人と会うことも許されない。違反した場合には財産没収と焚刑、市外からペストを持ち込んだ者も財産没収、ペスト患者に許可なく近づいた者も死刑と財産没収を命じられた。治療のための隔離か遺棄かがわからない法であった。

ヴェネツィアでは一三四八年に衛生監督官三名が任命され、公衆衛生局が設けられた。その職務は漸次整備され、定期清掃、検疫、病院運営、医療体制の構築、薬剤管理、ペスト流行時には集会禁止、学校閉鎖、病舎増設、遺体処理、死亡表作成などが加わった。

次に黒死病による心性の変化として、宗教心の高揚と低下という真逆の傾向を指摘できる。疫病を神からの警告や試練と捉える人々は、贖罪として自らに苦役を課す行動に出、鞭打ち苦行団が再興した。各地を行脚して八〇万人まで膨れ上がった鞭打ち運動は、逆にペストを広め、ユダヤ人を迫害し、反教会の態度を取ったこともあって禁止されるに至る。また、宗教心の高揚は教会に多額の寄付をもたらした。聖堂の新築や改装、内陣用の絵画制作が行われた。メント・モリ（死を忘れるな）が語られ、死の勝利や死の舞踏など、死をテーマにした作品が制作された。他方、大量死は遺体の路上への放置や粗略な埋葬を余儀なくし、死者の尊厳が失われた。かくして教会の権威が弱まって敬神の念も薄れ、享乐的で背徳的な生活に耽る者も出てきた。黒死病の犠牲者の遺産



ペスト医
モニクリュスネ「ペストのフランス史」同文館より。

レンツェ郊外に脱出したように、逃亡する者も多かった。よそ者の到来に警戒心を募らせ、入市を禁止する都市も出る。ペスト禍の生贄になったのがユダヤ人だ。ユダヤ人が毒物を井戸や泉に投げ込んだという噂が飛び交い、一三五一年までに大小二一〇のユダヤ人共同体が壊滅させられた。

極度の不安と恐怖でパニックに陥った人々の行動と心理は、当時アヴィニオンにいた教皇主治医の報告にもみとれる。「病人は看取ってくれる人もなく死に、埋葬に立ち会う司祭さえいなかった。父親は子を訪ねることもなく、子は親を見捨てた。慈善活動は廃れ、希望は消滅した。多くの人々が、この大疫病について自分勝手な解釈を考え出した。ある地方では、ユダヤ人たちが世界に毒をまいているのだと考え、数多くのユダヤ人がそのために殺された。またある地方では、不潔な貧民たちが、空気や食物、飲物を汚すのが原因だとして、貧民たちを街中から追放した。……街の人々は、町や村の入口に歩哨を立て、知っている顔以外は町へ入ることを拒むようになった」。

それでは、医療・心性・経済におけるペスト後の新しい日常を検討しよう。医療面では隔離・検疫・公衆衛生が舞い込んだ者は、俄成金として贅沢三昧の生活を送った。また教会の威信低下は、傭兵隊長がミラノ公やウルビーノ公に出世したように、個人の才覚と欲求によって運命を切り開いていく新しい人間が登場させた。

人口動態上、晩婚化・非婚化・寡婦や寡夫の再婚ブームをもたらした大量死は、経済面では労働力不足・食糧需要の減少・穀物相場と地価の下落を惹起した。都市でも農村でも労働力不足は賃金上昇を招き、パリの左官は黒死病の五年間で日当が倍増した。それ故、フランスではジャン善王（ジャン2世、ヴァロア朝第2代のフランス国王。在位一三五〇～一六四年）が賃金規制を行い、イングランドでも一三五一年に賃金凍結法が制定されている。また小麦価格は一時的に急騰したが、ペスト後にはペスト前の半値まで下がった。大量死によって耕作者がいなくなった農村では農民による耕作放棄が相次ぎ、農奴の待遇改善や地代の軽減を強いられた領主の家計は悪化する一方であった。領主の家計や国庫の建て直しのために取られた封建反動や増税に対して、ジャックリーの乱やワットタイラーの乱が起き、後者の乱では農奴制の廃止が掲げられた。

総括しよう。黒死病後の新しい日常は公衆衛生を生み出し、ルネサンス期に活躍する人間を用意し、農奴制の弱体化と自営農民の興隆を決定的にして中世社会の終焉を早めたのである。

1 ジョバンニ・ボッカッチョによる物語集。

2 鞭で体を打つことで贖罪を行い、功德を得ようとする集団。

【参考文献】

- 村上陽一郎『ペスト大流行』岩波書店、一九八三年
- 蔵持不三也『ペストの文化誌』朝日新聞社、一九九五年
- 宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版社、二〇一五年

死の舞踏
小池寿子
『死の舞踏』への旅
中央公論新社より。



パンデミックのなかで読書するということ

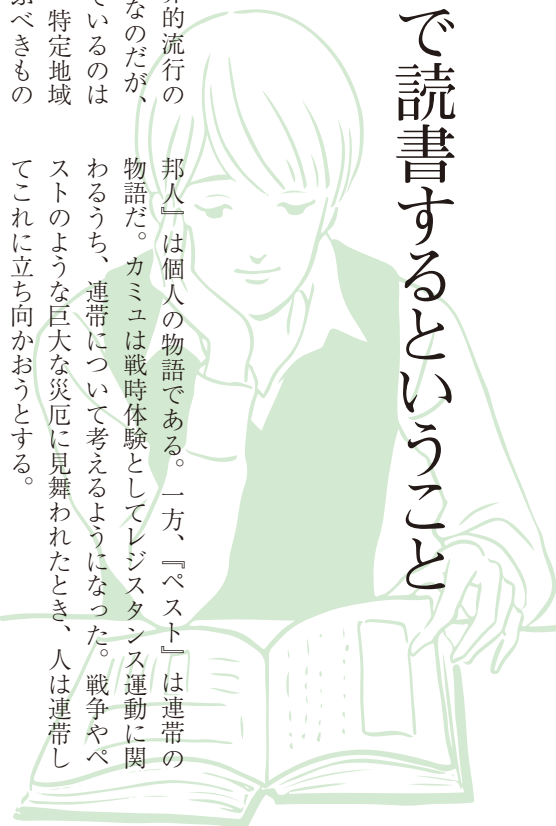
重松 恵美

本学文学部日本語日本文学科助教

今、私たちは、新型コロナウイルスの世界的流行のまっただ中にいる。つまり現状はパンデミックなのだが、実際のところ私たちの目の前に繰り広げられているのは（この原稿の執筆時は二〇二〇年初冬である）、特定地域における感染急増であり、エピソードと呼ぶべきものに見える。人々は感染の広がりを封じ込め、押さえ込むうとする。これは、人が感染症をコントロールできるか否かの瀬戸際だ。人間の尊厳をかけた厳しい闘いが、そこかしこで日夜展開されている。今、私たちは、どのような行動に出るべきだろうか。私にどんな選択があるというのだろうか。

さて、この原稿を書くにあたって「私たち」の語を用いたのは、アルベール・カミュに敬意を表していることである。今、カミュの『ペスト』がよく売れているという。宮崎嶺雄訳、新潮文庫の『ペスト』は、この一年弱で三十六万部余りを増刷したとのこと。ペストの蔓延する街が封鎖されるが、人々は大切な人を亡くしながらも病と闘い、ついに開門の日を迎える。作品発表から七十余年の時を経て、世界中で共感をもって読まれている長編小説である。

カミュは『異邦人』の作者として知られているが、『異



邦人』は個人の物語である。一方、『ペスト』は連帯の物語だ。カミュは戦時体験としてレジスタンス運動に関わるうち、連帯について考えるようになった。戦争やペストのような巨大な災厄に見舞われたとき、人は連帯してこれに立ち向かおうとする。

連帯ということについて、小松左京はこんな風に書いている。

土屋医師はふと病気や死と闘うものたちの連帯を考えた。——そうだ、こいつはやっぱ闘いだ。きりのない、はてしない闘い……ここ——K——病院だけでなく、今、日本中のありとあらゆる病院で、同じ闘いが、医師たちの手によって闘われているのだ。土屋医師と同じように、不眠不休で、食事をとるひまもなく、疲労困憊して自分がぶったおれそうになりながら……。いや日本だけでなく世界中で……。

小松左京は一九六四年、二つの長編小説を立て続けに発表した。『日本アパッチ族』は大阪大空襲の焼け野原で鉄を食らって生き延びる人々を描き、『復活の日』は米ソの軍縮協定の行方や細菌兵器を巡る諜報戦を背景に、世界を席卷する謎の感染症と、その災厄を生き延びた人々を描いた。これらの小松作品も『ペスト』同様、

作者の戦争体験を経て書かれたものだ。

『復活の日』において、「不眠不休」で闘う土屋医師の姿は短い出番ながら鮮明である。土屋を休憩室に誘った田辺医師は「台風でもきたみたいですね」と言う。「婦人会や主婦有志が、炊き出しをしてくれてるんです」と語る田辺に、土屋は「少し顔をほころばせ」て、「母親がよく、関東大震災の時に、一晩で三千個のにぎり飯をにぎったと話してくれた」と応じる。土屋はこうして、医師たちの仕事を支援しようとする人々の存在に思い至る。そして過去の様々な災害を思い起こすことで、これは孤独な闘いではないと幾分安堵したことだろう。

『復活の日』の災厄は細菌兵器の流出事故によりもたらされたが、帚木蓬生『アフリカの蹄』（一九九二年）には絶滅したはずの天然痘を人為的に流行らせようとする悪意ある人々が登場する。

事の発端は、黒人居住地で流行する謎の感染症だった。白人は感染せず、黒人は満足な治療も受けられない。本作の中心人物は日本人医師の作田で、彼は名誉白人としての立場を捨て、患者を治療し、ワクチン製造のため身元を偽り、国境を行き来する。作田の勇敢な活躍は黒人たちに力づける。一方、作田から病原体の検出を依頼されたウイルス学の研究者ジュリアン・レフ助教は、教授から標本の始末を命令される。国家的陰謀に対して見て見ぬふりをするのか、危険を顧みず作田や黒人たちに協力するのか。彼は悩み苦しみながら父と共に秘密のワクチン製造の手はずを整える。

作品終盤部、レフは記者会見場で衛生局長を追及するが、このとき父は誘拐され生死不明となり、レフ本人の身も危険にさらされている。「この病気は天然痘類似のものではなく、天然痘そのものです」と彼は言う。そし

て、「この国の衛生局が痘瘡ワクチンを保有しているのは疑いようのない事実です」と衛生局の秘事を暴く。そのワクチンは白人の子供たちだけに、ひそかに接種されていた。レフは淡々と事実を指摘し、断言し断罪する。その言葉の端々に彼の怒りがにじみ出る。そもそも作田がレフを頼ったのは、「日本に無知」な学者たちの中で、唯一レフだけが「好奇心をむき出しにして作田に話しかけてきた」ことがあったからだ。彼は痘瘡ウイルスを眼前にしたとき、一人の研究者として人々と連帯する道を選んだのである。

最後に、川端裕人『エピソード』（二〇〇七年）は、今、私たちの状況に最も近い小説だ。関東南部の海辺の町で激しい肺炎症状の患者が続出する。「SARSだの、新型インフルエンザだの、恐ろしい情報飛び交う」本作は、二〇二〇年現在の読者にとって場面場面が真に迫っていて、ここに詳述するのをためらうほどである。

本作で活躍するのはフィールド疫学者で、彼ら疫学者が感染地域を歩き回り、聞き取り調査をし、データを分析して感染源を突き止めるまでの十日ほどの出来事が、文庫本六百ページにつづられる。作中の疫学者たちは保健所の協力を得て活動する。新型コロナウイルス対応で日本各地の保健所がフル稼働している現在、感染ルートの究明という仕事の重みは身近に感じられるものとなっている。

コロナの時代はまだ続く。私に何ができるだろう。読むことと考えること、それは人間を信じて静かに時をすごすということ。小説の中の人々の闘いと悩み、苦しみ、悲しみを受け止める。今、この現実の中で闘う人々に想いを巡らせる。今もどこかで誰かが、と思いながら、読書する。

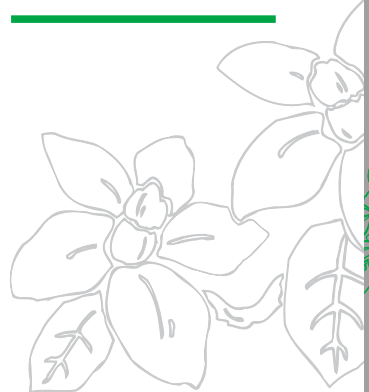


44

●連載●イギリス女性生活誌 一九世紀イギリスの レジエント・ウーマンたち5 ―レデイにとっての天職、ディストリクト・ナース―

松浦 京子

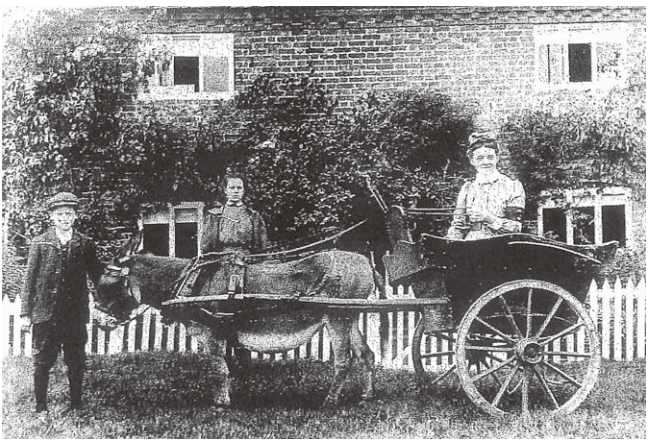
本学文学部歴史学科教授



前回に続いて、フロレンス・サラ・クレイヴン（旧姓リー）を取り上げる。彼女は、近代看護の母ともいえるナイティンゲールから厚い信頼を寄せられた有能なレデイ・ナース（正規訓練を経た高い教養と出自を持つ看護師）であり、また、なにより、組織活動として揺籃期から発展期に移行しつつあった巡回訪問看護において大きな足跡を残した女性である。前回記事で述べたように、イギリスの巡回訪問看護は一九世紀半ばに貧困層を対象とした慈善救済活動として篤志組織によって組織化されたという歴史を持っており、そこには以前から中流階級女性によって行われていた家庭訪問活動という慈善の伝統が脈々と息づいていた。そして、同時に、ナイティンゲールの登場によって「看護」の価値が社会的に認知されたことによるナースへの社会的認識の変化も大きく関わっていた。

のである。すなわち正しい訓練をうけるに必要な知識と技術を身に着けた専門職者としてのナース像の形成を背景として、中流階級女性によるヴォランティア活動（アマチュア）がプロフェッショナルな看護活動と連携するという形態が可能となったのである。

それゆえ、この新たなナース像、当時の言葉でいえばトレイインド・ナースのなかの「とびきり有能な」ナースであったクレイヴンは、巡回訪問看護の発展充実の先導役を託されたのである。



1890年頃のグロスターシャーの郡部を驢馬車で巡回するディストリクトナース。
出典：S.Cohen, The District Nurse, Oxford, 2012.

欧米各国での研鑽や活躍を経て一八七三年に帰国した彼女は、ロンドンの有力者や宗教系組織によって進められていた新たな訪問看護組織設立プロジェクトのための実地調査をまかさし、一年をかけて全国各地の篤志看護組織を回り報告書をまとめた。その結果は、巡回訪問看護の篤志活動の着実な広がり、その一方、活動を行うにあたって要となるトレイインド・ナースの確保の難しさを指摘するものであった。そして、この結果を踏まえて一八七五年にロンドンに新設された「貧民患者へのトレイインド・ナース提供のための首都ならびに全国協会（冒頭の頭文字をとってMNAと略称された）」において、彼女は実際の活動を指揮することとなるのである。

この新組織MNAにおいて、クレイヴン（当時は結婚前なので正確にはリー）は総監督として、訓練拠点兼ホームをブルームズベリに開設し、訪問看護の専門訓練と看護活動の査察・指導を提供する体制を作り上げていく。そこには、貧困層を対象とした巡回訪問看護という単独で過酷な状況下での看護活動を担うディストリクト・ナースは、より高い能力と女性としての高い資質が必要とされるといって彼女の（同時に彼女にとっての師でもあるナイティンゲールの）信念が結実していた。すなわち、採用に際しては病院での一定の勤務経験のある者（トレイインド・ナース）を前提とし、そのうえで彼女の監督の下で訪問看護の実地訓練を積ませるといふものであり、また、一人前となっても常に総監督による指導を受けるというものであった。彼女は、ディストリクト・ナースを病院看護師とはまた異なる専門性を持つ看護師として捉え、そうした看護師像の確立を期待していたのである。

ただし、専門性といっても、それは看護技術的な面での高度化というより人格資質的な面での優位性であり洗練であった。当時の訪問看護においてなまじうすることは物理的制約により限られており、実際に最も必要とされるのは患者への献身と奉仕の意識にもとづく活動であった。加えて、看護の専門家として患者本人ならびに周囲への助言と教育指導も重要な任務であった。そ

うした意識と能力をもつディストリクト・ナースの養成を期して、彼女が念頭に置いたのが「ジェントルウーマン」、レデイたる教養ある中流階級の女性であった。実際にこれを採用の条件としたのである。

この事実は、当時の社会ならではの階級的偏見の表れとも言えるが、一面では、看護職をかつての「卑しい女がする」仕事から意義ある専門職へと引き上げ社会的に認知させるために、中流階級女性が従事することが求められていたことを物語っている。そして、看護職の中でも、自律性が高いものの過酷な状況下での活動を必要とするディストリクト・ナースには、より特別な存在としての価値と自己認識を持たせるために、こうした条件を掲げたと考えられる。

以下は、クレイヴンが率いたMNAの発展形として一八八九年に女王在位記念基金を用いて設立された「ウィクトリア女王在位記念看護師インスティテュート（QIと略）」の発足にあたり、巡回訪問看護の指導書として、彼女が発表した『ディストリクト・ナースのための手引き』の冒頭の一文である。

「ディストリクト・ナースには、病院看護師もしくは病院の看護師長より高い教育と女性としての高い資質が必要とされる。ディストリクト・ナースは、貧民に対する真の愛情と、彼らが置かれている悲惨な状況を和らげたいと心から思う気持ちを持っていないければならない。これがなければ、彼女が対象とする人々の辛さや悲しみに共感することなど決して出来ないし、また、良き影響力を彼らに及ぼすことなど出来ないものである。ディストリクト・ナースはジェントルウーマンにとってもっとも相応しい職業である、なぜなら、相手の気持ちを傷つけることなく衛生改善を勧めるためには機転と思慮分別と育ちの良さが必要とされるのだから。」

そして、このクレイヴンの理念どおりに、QIで養成され各地に派遣されて活躍したディストリクト・ナース、その名もクイーンズ・ナースと呼ばれた女性たちは、高い意識と責任感を持ったレデイであったのである。



近代日本音楽史を 彩る女性たち

5 明治楽壇の開祖 幸田 延 (その3)

佐野 仁美
本学発達教育学部
児童教育学科准教授



幸田 延
写真の出典：園部三郎『音楽五十年』

一九〇九（明治四二）年に東京音楽学校を追われるように去った幸田延（一八七〇―一九四六）は、約1年間ベurlin、ウィーン、パリ、ロンドンに滞在し、頻繁に演奏会に通い、レッスンを受け、音楽院の授業を聴講するという日々を過ごした。延は若かりし頃に留学した日々を思い出し、音楽への情熱を新たにす。東京音楽学校を卒業した後、三菱財閥の岩崎小弥太の援助で留学した山田耕筰（一八八六一―一九六五）の回想によれば、滞欧中の延を訪問し、ベルリン王立芸術アカデミーで作曲を学びたいという希望を伝えたところ、「作曲？むずかしいわね

え！」と言われたという。自ら作曲も手掛けていた延なりの発破のかけ方だったのだろう。翌年、延は入学した山田に『メーリケ詩集』を贈っている。またロンドンでは、開催中であった日英博覧会を見学した。この旅で延は、西洋音楽を取り入れてから日が浅く、評論家も育っていないために正当な評価を得られなかった日本の狭い音楽界に比べ、音楽が家庭にまで浸透しているヨーロッパでは、厚い聴衆層が伝統を支えている様子を痛感したのである。このことは、その後の延の生き方を決定づけることになる。

外来の音楽家を招待できる音楽堂を欲しいと考えた延は、一九一八（大正七）年に、紀尾井町の自宅に「洋音楽堂」を設けた。そこには黒いスタインウェイのピアノが置かれ、正面にベートーヴェンの石膏の胸像が飾られていた。ちょうど第一次世界大戦後には、復興に時間がかかったヨーロッパから、市場を求めて多くの音楽家が来日し、人々は日本に居ながらにして、本場の音楽に触れることができるようになった。以前に比べてレコードが普及し、西洋音楽への理解が進んだのである。延は一九二〇年にヴァイオリニストのエルマンや、翌年に来日したゴドフ

スキーなど、第一級の来日音楽家を招き、また、かつて東京音楽学校で教鞭をとっていたシヨルトツ、ベッツォールド、ウエルクマイスターらの外国人教師とともに、和やかな時間を過ごすこともあったという。

ところで、延は一九三二年の第1回から音楽コンクール（現日本音楽コンクール）の審査員をつとめていた。その創設に関わった音楽評論家、野村光一（二八九五―一九八八）は、「洋音楽堂」を訪れた際、ベートーヴェンの胸像に強い印象を受け、ベートーヴェンのような威厳を持った人物として、延を語っている。野村は「幸田先生は厳格な方で、御自分でもドイツ音楽の精神をはっきり持っていました。『中略』そういう頑強なドイツ精神は、大正末期や、あるいは第一次大戦までの東京音楽学校の音楽精神ではなかったかというふうにも思いますね。そのようなものを幸田先生は初期の音楽学校時代に植えつけられたのではないかと述べている。唯一の官立の音楽学校であった東京音楽学校を取り巻く明治・大正期の音楽界においては、「楽聖ベートーヴェン」という言葉に象徴されるように、ドイツ音楽を中心に受容されていた。たとえば、冬の月が冴えた夜に、ベートー

ヴェンが盲目の少女の為に《月光ソナタ》を奏でたというような伝説とともに、ベートーヴェンという偉人の名が広まっていたのである。そして、理解できるかどうかは別として、絶対音楽（交響曲に代表される標題を持たない音楽）のような形式のきちんとした「真面目な音楽」こそが「何やらすごい音楽」として崇拜の対象となり、楽しみや娯楽のための音楽は低く見られるという、音楽が一種の精神論の中で受け取られる傾向があった。野村にとつては、崇拜されていた厳格な表情のベートーヴェンと延のイメージが重なっていたのである。

延は、「まず家庭から音楽を、それがないければ洋楽の普及は難しい」との考えから、兄の幸田露伴が「審声会」と名

付けた会を主宰し、上流階級の子たちへの教育が活動の中心となる。皇太子妃（のちの貞明皇后）をはじめ、皇族方にピアノを教えたことからもうかがえるように、当時ピアノは、上流の家庭から備えられていたのである。弟子たちは、与える曲もそれぞれに異なり、一人一人の個性や性質をよく見抜いた指導であったと語っている。弟子の下坂道子によれば、延の教えは休止符や1音1音を大切に扱うこと、フレーズを知り、心の中でうたって弾くことなど、オーソドックスなものであった。教え方は厳しかったのである。シヨパンを好み、自分が死んだらバッハの平均律第8番のプレリュードで送ってほしいといった言葉からは、「楽界の西太后」と揶揄されたのとはかけ離れた、延の人間的な姿も伝わってくる。

さらに、日本音楽のかけ声をとともよい「間」と捉え、音楽の「間」を重要視していたという証言からは、幼少から邦楽を嗜んでいたという経験が思い起こされる。このように、邦楽にも通じ、もともと音楽的な感性を備えていた延は、自らの宿命を受け入れ、大変な努力と気概を持って、未知の領域である西洋音楽を学んだ。マスコミをにぎわせ

た華やかな前半生と比較しがちであるが、西洋音楽への道を拓いた人間として、延は、「これだけを教えておいたならば、次の世代にはもう少しましな人間が出てくるだろう」という期待をこめて、「音楽を家庭に入れる」ために、後半生をピアノ教育に捧げたのである。

主要参考文献

- 幸田延子「歐樂界の盛況」『家庭と音楽』『音楽界』第3巻第10号、一九一〇年、56―59頁。
- 幸田延「私の半生」『音楽世界』第3巻第6号、一九三一年、33―42頁。
- 幸田延「自分に似合ひの曲を」『月刊楽譜』第23巻第11号、一九三四年、48―49頁。
- 後藤暢子他編『山田耕筰著作全集3』岩波書店、二〇〇一年。
- 日本洋楽資料収集連絡協議会編『紀尾井町時代の幸田延』日本洋楽資料収集連絡協議会、一九七七年。
- 野村光一『ピアノ回想記』音楽出版社、一九七五年。
- 萩谷由喜子「幸田姉妹―洋楽黎明期を支えた幸田延と安藤幸」シヨパン、二〇〇〇年。
- 平高典子「幸田延のヨーロッパ音楽事情視察」『玉川大学芸術学部研究紀要』第7号、二〇一五年、13―27頁。

物語の女性 5

『源氏物語』の明石の君

野村 倫子 本学文学部日本語日本文学教科教授

明石の君の登場は、光源氏の六条院の女主人といわれる紫の上よりも先である。光源氏が病氣治療のために北山の聖を訪ねた時、同行した良清が父の任国播磨に住まう明石の入道の娘を話題に取り上げたからだ。近頃出家した前播磨守は、かつて近衛中将であったが変わり者で、国司として下向後、任果てても帰京せず、妻子とともに播磨に留まっていた。その娘に代々の国司が求婚したが、入道はすべての求婚を断り、自分の死後思う所の「宿世（宿命）」が叶わない時は、海に身を投げよと常に遺言しているというのであった。源氏は「海竜王」の后になるような姫君だと笑ってその場は終わり、その直後に出会った若紫を中心に以後の物語は進行する。

光源氏が明石の君と出会うのは、兄の朱雀帝が即位し、父桐壺院の薨去によって政権が右大臣側に移った後である。

源氏が隠棲した「須磨」巻で、明石の入道は桐壺更衣のいとこで、又いここになる光源氏と明石の君は結婚関係を結ぶのに自然な関係にあることがわかる。入道は娘の縁を住吉明神に求め、年に二度も参詣していたが、当の女君は田舎育ちの中流貴族である「身のほど」を自覚し、光源氏との結婚は慮外だと考えていた。

しかし、暴風雨が続き、夢に海竜王の招きを告げる異形の者が出現し、落雷の果てに亡き父桐壺院が生前さながらの姿で出現するに至ると、光源氏も須磨を去る決意をする。折しも明石の入道の遣わした船が到着し、源氏はその船で明石まで運ばれる。しかし、心は常に都の紫の上にあり、入道の勧めに応じて娘のもとに通うのはようやく五ヶ月経ってからであった。明石の君は「身のほど」意識に悩んで応じないが、気品ある姿に魅かれた源氏は正式

な通い所とした。

翌年の六月に懐妊がわかるが、同じころ、都から赦免の報がとどき、源氏は氣遣いしつつも女君を明石に置いて帰京した。

しかし、帝と后がそろって生まれ、劣った一人も太政大臣になるという三人の子供の将来を告げる「宿曜（占星術）」が光源氏の心を占める。藤壺女御との間に密かに得た皇子は当代の天皇、左大臣家の葵の上との間に生まれた夕霧は将来太政大臣になる可能性がある。摂関政治では「后」の存在こそ権力掌握の要となるが、現在の光源氏には娘はいない。「住吉の神のしるべ」による明石の君の縁、その「宿世」も勘案するとやはり都に引き取るべきだと源氏は考え始める。そこには将来自分の娘が「后」になるといふ占いの結果が大きく働いている。果たして、明石では女兒が誕生した。源氏は都

で乳母を選定して明石まで赴かせ、また五十日の祝いにも使者や贈り物を遣わす。

中務宮の孫である明石の君の母（明石の尼君）は京の西大堰川（現在の桂川）の辺りに別荘を所有していたので、そこを改装し尼君・明石の君・姫君の三人で移居した。光源氏は紫の上をばっかりながらもそこで姫君の成長を楽しみ、いずれは二条の東院に迎えるつもりでいた。しかし、姫君が三歳になると着袴の儀を意識し、このまま明石の君のもとに姫君を置くことに不都合を感じ始める。着袴は家庭内行事ではなく、貴族社会に子どもが存在を紹介する重要な機会であったからだ。紫の上に着袴の腰結いの役を担わせ、紫の上の養い子として貴族社会に披露する計画を源氏から聞かされた明石の君は、母子離別の苦痛よりも姫君の将来を考えよという尼君の助言に従って、手離す決心をする。「薄雲」巻で、雪の日の娘との別れが悲しい。無邪気に車に乗ろうとする姫君と一緒に乗るよう母の袖を引く。その姫君の幼さに涙する明石の君に向かい、源氏は将来を待つよう慰める。乳母も「御佩刀、天児」など姫君を守護する守り物のみを持って紫の上の待つ二条院に移り、明石の君との音信も絶える。

やがて六条院が完成すると、姫君は

紫の上とともに春の御殿に入り、明石の君は他の女性達から遅れてひっそりと冬の御殿へ移る。同じ院内にいなながら母娘の交流は断たれたまま五年がすぎ、姫君八歳の新年、挨拶のために女君たちの部屋を順に訪れる光源氏に対して、明石の君は「けふ鶯の初音きかせよ」と苦しい胸の内を詠み、源氏も姫君に勧めて実母へ返歌を作らせる。

夕方、姫君の返歌を持って明石の君を訪れた源氏は、行き届いた部屋の室礼の優雅さに改めて品格を感じ、紫の上に気兼ねしつつもそのまま一夜を過ごした。

姫君が十一歳になると、裳着が行われる。この度は光源氏の養女である秋好中宮（六条御息所と前坊の間に生まれた姫宮）が住む六条院の秋の御殿が会場となり、裳の帯を中宮が結う盛儀となった。しかし、華やかな儀式に実母の姿はなく、娘の裳着に出席できない明石の君に対してさすがの源氏も心苦しく思う。そして東宮入内の日を迎えると、養母の紫の上が光源氏の北の方待遇で、女御と同じく御輦車に乗る一方で、明石の君は女御の世話役待遇として徒歩で参内するが、その姿さえ姫君の「玉の瑕」になるのではないかと思慮深く振舞った。入内後の女御（明石の姫君）の世話を引き継ぐ夜、明石

の君は初めて紫の上に対面し、互いの技量を知って認めあう。紫の上もまた明石の君が光源氏の寵愛を得ていることに納得する。

その後、女御は東宮の第一皇子以下次々と皇子皇女を得、御代替わりには中宮になり、一の皇子は東宮となる。最初の出産の折に、明石の尼君は女御に、明石の君が辺境の地で出産して以来幸いを得るまでの苦渋に満ちた選択の半生を聞かせ、父入道からの手紙に明石の君はその思いをかみしめた。

時を経て光源氏亡き後の「匂兵部卿」巻に至ると、「ただ一人の末のためなりけり」と見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり」と壮大な六条院が明石の君ただ一人に掌握されたこと書かれる。「身のほど」意識にさいなまれつつも、「住吉の神」に守られ、自身の思慮深さで東宮の外祖母の地位と六条院を手に入れたのである。身分ゆえに苦しんだ女君が晩年になって子孫繁栄と財産という至福の時を得たのは、作者の属する中流貴族の夢を具現した姿と言えようか。

1 (男女を問わず) 幼児が初めて袴を着る儀式。三歳から七歳くらいまでの間に行う。
2 公家の女子が成人した印として初めて裳を着ける儀式。



日本の伝統技術を守る

女性の進出 3

村上裕道

本学文学部歴史遺産学専攻教授

前編では、「建造物修理」に着目して女性の進出状況を調べるため、選定保存技術の保存団体である「(公財)文化財建造物保存技術協会」の女性職員から文化財建造物修理技師を目指した動機、職業として接してからの文化財建造物修理事業の印象、そして、その魅力、さらに、後継の人たちへの思いをお聞きしたところである。

本稿では、前号に続き、京都府教育委員会での文化財建造物の修理に携わる女性職員の状況についてインタビューを行うものである。

文化財建造物修理技師へのヒアリング

国宝・重要文化財建造物の保存修理に係る設計監理については、国が一元管理をしており各人の修理経験に照らして、国庫補助要項による特殊条件なラビに補助の条件として修理技術者の承認を行っている。

国宝・重要文化財建造物の過半が所



奈良裕美さん 重要文化財本隆寺本堂(京都市)にて

業の一番面白い所を教えてもらったことが興味関心を励起したらしい。文献より現場の立体的な四次元パズルの追及に魅力を感じる人であったようで、アシスタントとして習う実測・図面作成や痕跡調査及び記録作成を一日中行う作業も、むしろ楽しいと思っただらしい。

一九九九年に京都府教育委員会の専門職員(文化財建造物)として採用され、二〇〇二年までの内勤後、二〇〇三年から大徳寺塔頭玉林院の修理工事でスタートしている。その後、清水寺子安塔の解体修理工事や銀閣寺他の各種工事に従事して、技量の研鑽

在する近畿では、滋賀県・京都府・奈良県・和歌山県の四府県が府県職員として直接技術者を雇用し、文化財所有者から修理の設計監理を受託して、所在府県内の国宝・重要文化財修理の設計監理を担当している。

京都府では、文化財保護課に所属する文化財建造物修理技術職員は二〇人で、その内、女性職員は七名、三五%と他機関に比べて女性職員の割合が多い。今回は、女性職員で最もキャリアの長い奈良裕美さんにお話を伺った。

文化財建造物修理の印象

奈良さんは、京都府教育委員会文化財保護課において、女性で初めて国の承認を得て国宝の修理ができる、上級主任技術者である。

学生の頃についてお聞きすると、四回生のゼミに移って初めて文化財建造物等を見るようになったという。面白いことに、ゼミに移るまではサークル

に勤めている。そして、二〇〇七年に、併任として久世神社本殿屋根葺き替え部分修理工事を主任技術者として初めて実施し、二〇一三年に上級主任となり、二〇一六年から七間堂の本隆寺本堂他二棟の半解体修理工事を担当している。

主任技術者となって以降、修理工事の企画立案から実施計画、そして、現場においては多くの宮大工たちに指示を出し、設計監理の監督者としてマネージメントに注力するとともに、国庫補助事業の事務処理、所有者であるお寺等と調整を行なわねばならず、仕事の内容が変わったと話す。それは、二〇一六年から二〇二七年までの二二年間を要する大規模な工事に従事して感じる気持ちを表しているであろう。

女性進出の課題

最後に自身のキャリアを振り返って、この分野における女性の進出についての感想を伺った。京都府の文化財建造物の修理現場は、九割以上が市内の工事であり、単身赴任をする事例はほとんどないという。そのため、生活は比較的安定しており、仕事の内容も元々興味のある分野でもあり、疑問を挟む余地はないとのことであった。

に所属しており、古建築を見て回ることもなく、興味もなかったらしい。文化財修理に従事している人に聞くと、子どもの頃からお寺や神社に親しんでいた人が多いが、「小さな時は古い建物に興味もなかった」と笑いながら話した。

奈良県内に大学があったことから、ゼミで見学に行くこともあり、文化財に対して徐々に興味を持つようになったそうだ。そして、伝統的建造物群の保存対策調査に取り組み、各地の調査を始めたという。さらに、大学院へ進み、ゼミでの見学がきっかけとなり、奈良町の藤岡家住宅の修理工事現場で週二・三日、約一年間アルバイトをしている。その頃、歴史的建造物の魅力に開眼し、漠然と文化財建造物の修理工事に携わりたいと思うようになったらしい。大学院修士課程を修了後、また、文化財建造物の修理工事現場にいき、一年間みっちり現場の仕事を経験している。

文化財建造物の修理について、その頃の印象について聞いたところ、建物の部材の新旧の年代判定調査や過去の仕事の履歴を調べる痕跡調査等が魅力と感じたようだ。過去から現在までの建物の立体的な変遷を追及する修理事業

また、昇任期間の性差については、まったく感じたことはないと言い、事実彼女の上級主任に至る年数を見ると、一部男性よりも早いと感じた。仕事場の環境についても、設備面について見れば、下水道が完備されている京都市内の工事現場がほとんどであり、仮設の便所等も水洗で、部屋にはエアコンが常備されている。また、現場事務所には暗室が常設されており、同所が着替え室にも使えるので女性職員にも問題ないとのことであった。

なお、女性から見てこの文化財建造物修理の職場は比較的恵まれているのではないかと印象を持っておられた。そして、女性の就業率は今より上がると予想された。その場合、どのようにに妊娠出産の時期を考慮するか、女性の多い他の職種をならい、考える必要があるとのことであった。

確かに、京都府における女性の定着率は高い。途中退職が少ない一方で、奈良さんの印象でも、性別に関係なく能力を発揮できる職場としてみていることが感じ取れた。ただし、妊婦が足場を歩くのは、流石に考えられない。女性が半数近くになった時、内勤と現場の調整で乗り切れるか、そろそろ考え始める必要があるであろう。



『性からよむ江戸時代』——生活の現場から』

沢山美菓子 著 岩波書店 二〇二〇年

米澤 洋子 本学非常勤講師



岩波新書 (本体820円+税)

沢山美菓子氏の最新刊である。刺激的なタイトルから、「江戸時代と性的取り合わせ」が誘導する浮世絵や春画あるいは艶本といった性愛文学、そこに描かれる吉原の花魁や遊女などの淫靡な世界をイメージするかもしれない。しかし本書は、「家」の存続を希求する概念が民衆にも確立した江戸後期のごく普通の男女の「日常の性的いとなみ」にスポットを当て、そこから掘り起こされる江戸時代の「性と生殖」にまつわる諸相の解明に力を注いでいる。

副題の「生活の現場から」が示すように、夫婦の交合を書きとめた俳諧日記、不義の子をめぐる夫婦の相論を記した藩や村の記録、出産時の経過がわきくの産んだ四人の子は、すべて二才に満たずして死んでしまう。きくも七年間の四度の出産による疲弊か、三十代で命を落とす。著者は、一茶が妊娠中のきくに交合を求めた側面にも言及し、快楽を満たさんがための男の身勝手と性的禁忌を憚る女の意識のずれを見逃さない。

第二章 「不義の子」をめぐる

善次郎ときやのもめぐり

次は米沢藩の寒村に起きた善次郎ときや夫婦のもめぐりの顛末である。本来なら村内あるいは両家で解決されるべき問題がなぜ藩の裁定を仰ぐことになったのか。それは、離別した妻が出産した子を、夫が「不義の子」と申し立て紛糾したからである。その時に村役人が作成した「書付」「口書」などの調書から、善次郎の一方的な言い分をきやがきっぱりと否定し、「夫の実子」と主張したことがわかる。きやの父も「不義の子」ではないと、娘の出産に村役の立ち合いを求める。善次郎の言い分は退けられ、生まれた子は実子との藩の裁定が下る。きやは身の潔白を認められた。沢山氏は、「山村で起きた夫婦不和の出来事だが、江戸時代は女の身体と性の管理に、家・村・藩が深く介入していた」と述べる。

かる診療記録、性買売の大衆化に伴う「買う男」と「売る女」の意識を投影する町人の日記など、当事者の肉声が聞こえてくる貴重な史料を丹念に読み解いていく。それぞれの男女の現場は独立しているのですが、どの章から読んでも興味深い。それでは、スクープハンターさながらに、その現場を覗いてみよう。

第一章 交わる・孕む

小林一茶「七番日記」

俳人小林一茶の名を知らぬ人はいない。ここで扱われるのは、彼が文化七(一五年)にわたって記した『七番日記』である。中には日々の俳句と共に、一茶と親子ほど離れた妻きくとの「性の営み」の回数が赤裸々に記されている。

第三章 産む・墮ろす、間引く

千葉理安の診察記録

ここでは、一関藩の医師千葉理安の診察記録により、難産に遭遇した妊婦を無事出産させるまでの詳細を追う。何より妊婦自身の死を覚悟した言葉がリアルである。理安は産婆の意見も尊重しながら妊婦にも冷静に接し、医師としての力量を発揮する。

一方出産時に、胎児が胎内で死に、分娩ができない、あるいは胎盤が出てこない場合は墮胎作用のある処方を用いられた。また難産で母と子が危険な状態に陥った時には、母の命を救うために、胎児を母体から排出させる墮胎が必要とされた。母親さえ無事ならば、次の子どもを生むことができるという条理、つまり出産と墮胎の両義性が常に存在していたのである。

第四章 買う男、身売る女

太助の日記

江戸時代の性の場は、「家」と「遊所」に区分され、性質売が大衆化した。ここまで著者は家の中の男女の性について論じてきたが、新たに「遊所」をめぐる男女の関係を取り上げる。驚くのは天保期に人気を博した「諸国遊所見立角力并二値段附」なる番付にみる「遊所」の全国的な広がりである。沢山氏は、松江城下の町人太助が残

る。これだけで一茶を性の強豪とみなす向きもあるが、著者は単に「交合の記録」にとどまらない意味を見出す。そこには、妻の月水(月経)の日も書かれ、女性の身体や夫婦の性の意識、心情なども読み取ることができる。

五十二才にして故郷信濃の生活を手に入れた一茶。ともかく子宝を得て「家」の存続を願うあまりか、「夜五交合」「夜三交」「暁一交」「旦交」と連日のように夫婦の交合の回数を日記に記す。時には禁忌とされる祖先の墓参の夜にも交わるばかりか、強精植物の採集と服用も欠かさない。跡継ぎを切望する一茶の必死な姿が浮かぶ。妻の月水記録も最も妊娠しやすい日を見越してのことであろう。不幸なことに、

した『大保恵日記』を読みながら、藩公認の遊所以外に、非公認の「売女」の存在を指摘する。また「売女」同様の行為をする「自分稼」(隠売女)の実態や検挙の事例も挙げる。

第五章 江戸時代の性

本書の総論であり、江戸時代の性の全体像に迫る。著者は「生類憐令」に端を発する幕府や藩の妊娠・出産管理政策は人口増加政策と表裏をなすものであり、「家」の存続のため、婚姻・性・生殖の一致が計られたと述べる。さらに貝原益軒の『養生訓』が説く「性欲のコントロール」や「年代別の交接回数」の文脈上に一茶の実践や性の意識もあるとみる。また「農書」で否定される「遊女」は、「労働能力と生殖力」という農家の妻に求められる条件を欠いている存在として差別される。このように近代に続く性規範の中で生きた男女の営みの実態を、本書は重く誠実に伝えてくれる。

「歴史の中の女性を読み直す—女性史研究のいま—」

女性歴史文化研究所は間もなく創設30年を迎えます。この30年の間に女性史研究は着実に成長を遂げ、歴史や社会において女性が果たしてきた役割や意義について、多くの研究成果を生み出すとともに、社会に新たな視点を提供してきました。そこで今回は、日本史・西洋史から一人ずつ論者に登壇してもらい、歴史上の「女性」について、どのように認識が変わり、どのように新しい視点が提供されてきたかをわかりやすく語り、議論してもらい、間接的ながら女性史研究の意義や歩みを参加者に理解してもらうためのシンポジウムとしたいと思います。

日時

2021年 **6月19日(土)** 13時00分~16時30分

会場

キャンパスプラザ京都

JR「京都駅」中央口より徒歩約5分（ビックカメラJR京都駅前）

講師

細川 涼一（京都橘大学名誉教授／元学長）

渡邊 和行（京都橘大学文学部歴史学科教授）

司会・コーディネーター

増淵 徹（女性歴史文化研究所所長／京都橘大学文学部歴史学科教授）



<受講料> 無料 <定員> 120名 * 4月19日(月)より先着順にて受付

<申込方法> 本学HPの申込フォーム(右記QRコードからアクセス)・E-mail・電話・FAXにて受付。

①講座名 ②氏名(漢字・フリガナ) ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号を添えてお申し込みください。
複数名でお申し込みの場合は、全員分のお名前をお知らせください。

<申込・問合せ先>

京都橘大学 女性歴史文化研究所(学術振興課)

TEL. 075-574-4186(直通) *受付時間 9:00~17:00(土日祝を除く)

FAX. 075-574-4149 E-mail aca-ext@tachibana-u.ac.jp



LIME 通信

2020年、東京オリンピック開催に沸くはずのこの年、新型コロナウイルスが大流行して地球規模で感染が拡大し、パンデミックが起きました。これまで経験したことのない社会情勢に、人々の日常が揺るがされています。本号では「感染症」に焦点をあて、歴史を振り返ることで、今後の生き方を考える機会としたいと考え、増ページでお届けすることにしました。

また、昨今の社会情勢で注目すべきは、アメリカ合衆国の大統領選挙でしょう。民主党のジョー・バイデン氏が大統領に選出され、

副大統領には、女性として、また黒人としてアメリカ史上初となるカマラ・ハリス氏が選ばれました。彼女はスピーチで言いました。「私は女性として初めての副大統領になりますが、最後ではありません。これを見ているすべての少女たちが、アメリカは可能性のある国だと知るからです」。まさに今、ガラスの天井が打ち破られようとしています。

「コロナ禍」の現在、より多くの困難があるかもしれませんが、人々が手を携え、正義と平和のもとに歩む世界となるよう、願ってやみません。

CHRONOS(クロノス) vol.44

発行日: 2021年3月

発行: 京都橘大学 女性歴史文化研究所
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149
E-mail: iwhc@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学
女性歴史文化研究所